

一次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

2000年代、インターネットというテクノロジーによって生まれた「情報」の台頭^aと入れ替わるようにして、「読書」時間は減少していた。「情報」と「読書」のトレードオフがはじまっていたのだ。しかし「情報」の増量と「読書」の減少^bにゾウカンがあるかどうかは、もちろんこれだけで導き出せるものではない。

だが一方で、それでは情報とは何なのか？^①読書で得られる知識と、インターネットで得られる情報に、違いはあるのか？という問いについて考えてみると、どうだろう。

「情報」と「知識」の最も大きな差異は、知識のノイズ性である。

つまり読書して得る知識にはノイズ偶然性が含まれる。教養と呼ばれる古典的な知識や、小説のようなフィクションには、読者が予想していなかった展開や知識が登場する。文脈や説明のなかで、読者が予期しなかった偶然出会う情報を、私たちは知識と呼ぶ。

しかし情報にはノイズがない。なぜなら情報とは、読者が知りたかったことそのものを指すからである。コミュニケーション能力を上げたいからコミュニケーションに役立つライフハックを得る、お金が欲しいからトウシのコツを知りたいそれが情報である。

情報とは、ノイズが除去された知識のことを指す。

だからこそ【X】を求める人に、【Y】を渡そうとすると「その周辺の文脈は知らない、ノイズである、自分が欲しいのは【X】そのものである」と言われるだろう。

インターネットとは、検索したりフォローしたり、自分の欲しい情報を得るための場である。もちろんそのなかで偶然の知との出会いがあったり、ノイズとなるような情報と出くわすこともあるだろう。しかし本質的には、インターネットの情報に求められているのは「ノイズなく、欲しい情報を得られること」だろう。

インターネットを介した情報のやりとりは、検索すれば手早く欲しい情報を得られるし、他人に情報を伝えるスピードも速い。情報を得たり広げたりする速さは糸井重里が「インターネット的」と呼んだ性質そのものの利点である。一方で、欲しい情報以外の偶然性を含んだ展開には、インターネットでは出会いづらい。しばしば「新聞を毎日めくっていたころは自分の興味のないニュースも入ってきたが、インターネットを見るようになってからは自分の興味のないニ

ュースは入ってこない」と述べる人を見かけるが、それもまた知識と情報の差異から来ている。

読書は欲しい情報以外の文脈やシーンや展開そのものを手に入れるには向いているが、一方で欲しい情報そのものを手に入れる手軽さや速さではインターネットに勝てない。

そしてインターネットの情報が台頭してきたなかで、インターネットの外の外部環境―労働環境は、新自由主義の空気に覆われ、さらにそのような社会を促進する。

市場適合と自己管理の欲望が促進される社会で、ノイズのない「情報」の価値は上がり続けていく。趣味もまた仕事にとってはノイズになる。そのような社会で、読書のような【A】を含んだ媒体が遠ざけられるのは、当然のことだろう。

(中略)

社会学者の上野千鶴子は「全身全霊で働く」男性の働き方と対比して、女性の働き方を「半身で関わる」という言葉で表現した。

身体半分は家庭にあり、身体半分は仕事にある。それが女性の働き方だった。

しかし高度経済成長期の男性たちは、全身仕事に浸かることを求めた。そして妻には、【B】を求めた。それでうまくいった時代はよかったかもしれない。だが現代は違う。【C】。

半身で働けば、自分の文脈のうち、片方は仕事、片方はほかのものに使える。半身の文脈は仕事であっても、半身の文脈はほかのもの―育児や、介護や、副業や、趣味に使うことができるのだ。

読書とは、「文脈」のなかで紐ぐものだ。たとえば、書店に行くと、そのとき気になっていることによって、目につく本が変わる。仕事に熱中している時は仕事に役立つ知識を求めるかもしれないし、家庭の問題で悩んでいるときは家庭の問題解決に役立つ本を読みたくなるかもしれない。読みたい本を選ぶことは、自分の気になる「文脈」を取り入れることでもある。

1冊の本のなかにはさまざまな「文脈」が収められている。だとすれば、ある本を読んだことがきっかけで、好きな作家という文脈を見つかったり、好きなジャンルという新しい文脈を見つかるかもしれない。たった一冊の読書であっても、その本のなかには、作者が生きてきた文脈がまつている。

本のなかには、私たちが欲望していることを知らない知が存在している。

知は常に未知であり、私たちは「何を知らないのであるか」を知らない。何を読みたいのか、私たちは分かっている。何を欲しているのか、私たちは分かっている。だからこそ本を読むと、他者の【D】に触れることができる。

自分から遠く離れた【D】に触れること―それが読書なのである。

(三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』)

問一 二重線部 a、e の漢字には読み仮名をつけ、カタカナは漢字に直し、ていねいに書きなさい。

問二 空欄【X】【Y】に入る最も適切な語を、漢字二字で答えなさい。

問三 傍線部①「読書で得られる知識と、インターネットで得られる情報に、違いはあるのか？」とあるが、「知識」と「情報」はどのように違うのか。本文中の語句を用いて四十字以内で答えなさい。

問四 空欄【A】に入る最も適切な語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 必要性 イ 妥当性 ウ 偶然性 エ 必然性 オ 具体性

問五 空欄【B】にあてはまる十字の文を考えて書きなさい。

問六 空欄【C】にあてはまる文を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仕事は男性が半身、女性が全身で働くものになるべきだ。
- イ 仕事は男性が全身、女性が半身で働くものになるべきだ。
- ウ 仕事は男女ともに半身で働くものになるべきだ。
- エ 仕事は男女ともに全身で働くものになるべきだ。
- オ 仕事は男女ともに全身、半身どちらでも働けるものになるべきだ。

問七 空欄【D】に入る最も適切な語を漢字二字で答えなさい。

問八 本文の内容と合致するものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代人の「読書」の時間が減少したのはインターネットが普及したからである。
- イ インターネット上では、偶然の知識やノイズに遭遇することは不可能である。
- ウ インターネットは、新聞より広い分野の情報を自然と身につけることができる。
- エ 「読書」は、知りたい情報以外に、作者のこれまでの人生にも触れることができる。
- オ 仕事に「半身で関わる」ことは、女性だけに許される優雅な生き方である。
- カ これからは男性も「全身」を仕事に使わず「半身」を育児や趣味に使うべきだ。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(旧字等、一部表記を改めたところがある。)

大学生の依田が下宿している未亡人のところへ、めいの久子が引き取られることになった。依田はそれまで使っていた離室を久子に譲り渡し、母屋の二階に移った。久子に惹かれながらも「家を出ようと決心している」。

久子に譲りわたして以来、一遍も入ってみる機会がなかったから、机の位置ぐらい知っていたが、委しい様子はわからなかった。自分のもとの親しい部屋が、彼女の娘らしい持物や、可愛い装飾品や、その他男の身のまわりには決して見出されない特殊な美しいもので、どう変わっているかを感じるのには彼の楽しい想像であった。今なら想像したものを実際に見られるのだ、という気が強くなった。彼らが出てからまだ三十分とはたっていない。少くともあと三十分はこの家でひとりつきりだ。カイカ^aにおいて十分ゆくり見たいものを見ることが出来る。もしその間にみんなが帰ったとしても、急いで茶の間の廊下まで来ていれば、便所^①でもおりましたか思われぬであろう。――あけっ放した、階段の見えている入口に近づく度に、依田は怖くなった。そのまま危く下に向きそうになる足を、わずかに働いている意志で食い止め、行き詰まった檻の中の獣のように引き返した。しかし最後には大胆になっていた。ぐずぐずしている間に、一気に駆け下りてしまえばいいのだと思った。彼は窓際から、拵えた落ちつきでまっすぐ踊り場にて、電灯のスイッチを捻った。

その時であった。表のくぐりのベルがけたたましく鳴り、誰か半分走っているような足音で前庭の長い敷石を駆けて来たのは。——玄関の戸が開いた。はじめベルを聞いた時には未亡人が帰ったのだと思い、依田はあわててつけたばかりの階段の電灯を消した。時機を失した残念さよりも、救われたようなところ安さを感じた。しかし足音と玄関の開け方で、帰ったのは久子ひとりだとわかった。なぜまたひとり先に帰ったのだろうか。——この疑いはすぐその後から激しい驚愕に変じた。久子は玄関から離室の方へ行く代りに階段を上って来るらしかった。帰った時の気忙しい様子とは打って変わった注意深いしずかな足どりで、灯もつけないで上って来る。留守をしてもらったアイサツのためか。平生の彼女から考えて、そうだとはい信じられなかった。では何の用事があるのだろうか。あれほど露骨な敵意を示している自分の部屋へ、しかも今まで決して来たこともない久子が来ようとしている。——うたがいと驚きと、漠然とした期待で、うす暗い階段のほうを見詰め、棒のように突っ立った依田の眼の前に、久子の白い浴衣をきた姿が、頭部から肩、肩から胸と順々にあらわれた。久子は俯向いていた。しかし階段を上りきると、顔をあげ、依田の方へしずかな一瞥を投げたから、そのまままっすぐに進んで来た。二人は部屋のまん中に三尺と離れないで向き合った。

「九月にはもう帰っていらっしやらないの。」

押えつけた、低い、かすれ声で久子は口をきった。その調子が依田のおどろきを二倍にした。彼は大きく瞬きをし、自分の前に立っているのがほんとうに久子であるか信じきれないように、相手を眺めた。左から受けた電灯のせいで、半面が青白く、半面が濃い陰になった久子の顔は、優しい言葉つきとは反対に硬ばって震え、一つの強い、これまで見たことのない感情で燃え上っていた。あの雑記帳の中の名前が、ほかの人の名前でなかったのを依田ははじめて信じた。

「奥さんが何かいいましたか。」

彼は夢中で口を動かした。

「いいえ、なんにも。」

「じゃ、どうしてそんなことをいうのです。」

「わたしがあんまりやんちゃをしたから、怒っていらっしやらないかとおもって。」

「馬鹿なこと。」

そういった時、実際不思議にも三カ月間依田を悩ましつづけた苦痛や不快や寂寥が、痕跡もとめないほど綺麗に彼のここから去っていた。

「じゃ、いらっしやるのね。」

「来ますとも。」

彼は誓うようにいった。久子の愛をたしかめた悦び、久子に待たれているというおもい、このつぎに逢う時は今までと別な久子に迎えられるのだと思う楽しい想像が、その嘘をもつとも自然に吐かせた。ほんとうは嘘ではなかった。彼はその瞬間どうにかして帰らなければならぬと決心した。机と書棚のことが意識に上った。二つのものは、少くとももう一度自由にこの部屋に帰る権利を彼に保留してくれているはずだ。その時どんな都合でそのままいることにならなともかぎらない。

時間にすれば、十秒とはなかったチンモクに対して、久子は敏感に念をおすように聞いた。

「いらっしやればいつ頃。」

「九月になればすぐ来ます。」

「十日ごろ。」

「それより遅くはならない。」

⑤ 今となれば帰る必要はなかったのです。そう打ち明けていってしまいたい気持ちだが、その時とつぜん彼を大胆にした。「指切りしてもいい。」

久子も率直に手をさし出した。二人は小指を繋いだ。わざと子供らしく高く振った。が、そのあとで急に熱い火に触れたようなあわたしきで久子の方から手を放したと思うと、彼女の両方の眼は涙でいっぱいになり、電灯に向けた明るい方の半面を大きな粒が転がり落ちた。

「わたしもどこか遠いところへ行つてしまいたい。——」

久子は急に咽びあげ、袖で顔を蔽うと、立っていられないように入口の柱に倒れかかり、声にだして泣きはじめた。その泣き方のあまりに発作的で猛烈なのが依田をびっくりさせさせた。どう慰めてよいか分らなかった。近づいてなにかいおうとすると、怒った泣きごえで遮られた。

「いいの。触らないで。——誰に慰めてもらわなくても、構ってもらわなくてもわたしはいいの。誰もわたしのことなんか考えてくれる人はいないんだから。いじめるか、欺すかするだけだわ。あんただって欺してるんだわ。——みんな、みんな知ってるわ。——ほんとうは九月から来やしないってことも。——」

「――」

⑥ 「御自分さえ田舎へ帰ってのんきになれば、ひとのことなんかどうなったって構やしないんだわ。」
依田は顔ばかりでなく、身体じゅうまっ赤になるのを感じた。彼は震えている久子の肩に飛びつき、今日までの苦しい思いに対して、その言葉がどんなに残酷すぎるか訴えたかった。しかし久子は嘘はいついていない。――強い恥と自責の念が彼の足を釘づけにした。なんにもいうことができなかつた。その暇がなかつた。門のベルが鳴った。
あわてて柱から離れようとして、ちらっと投げていった久子の、涙と愛と憎悪のまじり合った眼が、今はっきり依田の前にあつた。急いだ足音が階段を駆け下りた。

（野上弥生子「茶料理」）

（注）

*1 未亡人……夫に死別した女性。

*2 めい……自分の兄弟姉妹の娘を指す語。

*3 離室……母屋から離れて建てられた別棟の家屋。

*4 三尺……約九十センチメートル。

問一 二重傍線部 a、e の漢字には読み仮名をつけ、カタカナは漢字に直し、ていねいに書きなさい。

問二 傍線部①「そのまま危く下に向きそうになる足を、わずかに働いている意志で食いとめ、行き詰まった檻おかりの中の獣のように引き返した」とあるが、この一文から読みとれる依田の性格を次から選び、記号で答えなさい。

ア 積極果敢 イ 自暴自棄 ウ 意気揚々 エ 優柔不断 オ 泰然自若

問三 傍線部②「時機を失した」とあるが、どういう「時機」を失したのか。次の文に続くよう、二十五字以内で説明しなさい。

【二十五字以内

】時機を失した。

問四 傍線部③「漠然とした期待」とあるが、これは依田のどのような「期待」なのか。二十五字以内で書きなさい。

問五 傍線部④「今までと別な久子」とあるが、依田にとって今までの久子はどんな久子であつたのか。本文中の言葉を用いて二十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「今となれば帰る必要はなかつたのです」とあるが、依田が田舎へ帰る決心をしたのはなぜか。「今となれば」という表現に注意して、次の文の空欄に適語を入れなさい。Aは二字、Bは三字、Cは五字以内。

久子への【A】が通じず、苦痛や不快や寂寥の中で過こす生活に【B】をつけ、久子への思いを【C】ため。

問七 傍線部⑥「依田は顔ばかりでなく、身体じゅうまっ赤になるのを感じた」とあるが、このときの依田の感情（気持ち）を適切に表現している語句を、本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問八 「久子」の感情（気持ち）が最も顕著に表れている部分を、本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

三 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

古いにしへよりも、後世のまされること、萬よろづの物にも、事にもおほし。其一つをいはむに、古は、^{*1}橘たちばなをならびなき物にしてめでつるを、近き世には、蜜柑みかんといふ物ありて、この蜜柑にくらぶれば、橘たちばなは数にもあらずけおされたり。そのほか柑子*3、柚ゆ、香橙くねんぼ、橙だいたいなどの、たぐひおほき中に、蜜柑ぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似てこよなくまされる物なり。此一つにておしはかるべし。或は古にはなくて、今はある物もおほく、古はわろくて、今のはよきたぐひおほし。^{*4}これをもて思へば、今より後も又いかにあらむ。今に勝れる物おほく出で来べし。(I)の心にて思へば、(II)は萬に事たらずあかぬ事おほかりけむ。されどその世には、さはおぼえずやありけん。今より後また、物のおほくよきが出で来ん世には、今をもしか思ふべけれど、(III)の人、事たらずとはおぼえぬがごとし。

(本居宣長『玉勝間』)

(注)

*1・3 橘、柑子、柚、香橙、橙：いずれも柑橘類 *2 けおされたり：圧倒されている

*4 事たらずあかぬ事：不自由で不満足なこと

問一 傍線部①「ならびなき」とあるが、その意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア めつたに手に入らない貴重な
イ 比較する物がないほど優れた
ウ 過去に市場に並んでなかった
エ 他の物と比べると見劣りする
オ ちようど手ごろで食べやすい

問二 傍線部②「こよなくまされる物」とは、何のことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 古 イ 萬 ウ 橘 エ 蜜柑 オ 柑子、柚、香橙、橙

問三 傍線部③「此一つにておしはかるべし」とあるが、どんなことを「おしはかる」というのか。本文中から一文を抜き出し、はじめと終わりの三字を答えなさい。(句読点は含まない)

問四 傍線部④「今より後も又いかにあらむ」とあるが、今より後がどうなるというのか。それを表している一文を抜き出さなさい。

問五 (I) (III)に入る組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|---|----|---|-----|---|
| ア | I | 昔 | II | 今 | III | 今 |
| イ | I | 今 | II | 今 | III | 昔 |
| ウ | I | 昔 | II | 昔 | III | 今 |
| エ | I | 昔 | II | 今 | III | 昔 |
| オ | I | 今 | II | 昔 | III | 今 |

問六 傍線部⑤「しか思ふべけれど」は「そう思うであろうが」という意味であるが、どのように思うのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア けおされたり
イ よきたぐひ多し
ウ 事たらずあかぬ
エ さはおぼえずやありけん
オ よきが出で来ん

受 験 番 号

令和七年度徳島文理高等学校入学試験問題

国 語

注意

解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も文字数に入れます。
解答は解答用紙に楷書ではっきりと、ていねいに書きなさい。